

誰もが便利で過ごしやすい世界へ

山梨市立山梨北中学校三年 徳良 美緒

私たちは、生活を送る上で、目で見ても声で気持ちや意見を伝え合う。今の日本に限らず世界でも、そのようにして互いにコミュニケーションをとる。しかし、視覚や聴覚に障害があったら、どうすればよいのか。障害のある人たちは、生活を送るなかで、様々な差別や偏見を持たれ、苦しんでいるのではないか。その気付きを与えてくれたのは、夏休みに参加したボランティアチャレンジで出会った、聴覚障害者の男性だった。

私が参加したのは、聴覚障害者の方との交流や生活を知ったり、手話を体験したりする講義会だ。その講師として来ていたのが、聴覚障害者の男性だ。その男性は、生まれつき耳が全く聞こえない。そのため、コミュニケーションをとる方法は、手話や筆談・読話など、私たちには馴染みがない方法ばかりだ。筆談は、文字を書いて伝え合うため、私たちでもすぐにできる。しかし、手話はとても難しい。私も体験してみたが、複雑な指の動きが何種類もあり、とても覚えられない。男性は手話で講義をしてくれたが、手話通訳の方がいないと、私たちには伝わらない。反対に、私たちが普段通り声を出して伝えようとしても、その男性に伝わることはないのだ。その男性は、生活を送るなかで大変なことは、情報を得ることができないことだと教えてくれた。情報を得ることができないと、不便だけでなく、命にも危険が及ぶ。私たちが利用しているテレビやラジオなどによる情報は、音声によるものだ。それでは、聴覚障害者は情報を得られない。すると、私たちと障害者の間には、格差が生まれてしまう。男性によると、東日本大震災の発生時、情報が得られなかったために、避難できず命を落とした聴覚障害者がいたそうだ。また、男性は命の危険だけではなく、障害者に対する差別や偏見にも苦労していると教えてくれた。男性が、手話で挨拶をしても、誰も返してくれなかったり、道を訪ねても軽蔑するような目で見られたりするそうだ。ひどい人は、無視をしたり、体をのけぞらせて距離をとったりするという。一方で、障害者を不幸な人や可哀想な人として扱う人もいるという。男性は、「私達、障害者は不幸な世界で生きているわけではありません。不便な世界で生きているのです。多くの人が現状を知り、理解してくれることで便利で過ごしやすい世界になっていきます。」と手話で伝えてくれた。

これは、聴覚障害者だけではなく、全ての障害者の人にあてはまることではないか。このような現状で、人としての権利や自由が守られているとは言えない。では、どうすればよいのか。私たちには、何ができるのか。まずは、障害に対する知識をもつことが大切だ。日常生活で障害をもつ人と関わっている人は少ないだろう。しかし、直接関わらなくても、自分で調べ知識をつけることはできる。障害について知り、自分にできることを考えることで、障害者に対する理解も広がっていく。また、それを実践する。実践する機会がない人も多いだろうが、もし何の知識もないまま障害者に関わったら、その人の心や体を傷つけてしまうかもしれない。知識がないために、差別をしたり偏見を持ったりして人権を犯してしまうかもしれない。それでは、聴覚障害をもつ男性が伝えてくれた不便な世界のままだ。そしてさらに、不幸な世界にもなってしまう。多くの人が、現状に目を向け、障害者についての知識をもち、理解が広がれば、誰もが便利で過ごしやすい世界へと変わっていくだろう。

しかし、この問題では障害者だけではなく、その家族の人権も守られていないということが、少なくない。障害者の家族というだけで差別され、偏見をもたれ、一歩引かれ距離をとられる。そして、孤独になってしまう。さらに、家族は障害者に向けられた差別や偏見を一番近くで受けとることができてしまう。障害者本人が知らなくても、その家族は知ってしまう。大切な人を悪く言われたら、誰だって傷つくだろう。だから、私たちに必要なのは知識だけではなく、思いやる心を持つことだ。その思いやりでたくさんの人の心を救うことができる。

障害があるから、苦しい思いをしたり、不便な世界で過ごしたりしなければならない。その家族は、差別や偏見に耐えながら生活を送らなければならない。そんな考えはおかしい。不幸な世界でも、不便な世界でもない、誰もが、幸せで便利で過ごしやすい世界を、私たちの手でつくっていくべきだ。だが、それは簡単なことではない。しかし、多くの人が障害者に対する知識と思いやりの心を持てば実現できるだろう。今こそ、知識と思いやりの心を持とう。そして、それを広めていこう。そうすれば、差別や偏見に苦しむ人は、少なくなる。さらに、誰もが人としての権利と自由をもち、便利で過ごしやすい、そんな素晴らしい世界が私たちを待っているはずだ。